

## 1 テモテへの手紙1章3-11節 「違った教え」

### 1A 無益な議論 3-7

1B 信仰による神のご計画 3-5

2B 無知な律法の教師 6-7

### 2A 律法の有益 8-11

1B 正しくない者たちのもの

2B 栄光の福音

## 本文

テモテへの手紙第一です。テモテへの手紙は、テトスへの手紙と共に「牧会書簡」と呼ばれています。それは、パウロが教会全体に対して送った他の手紙と異なり、牧会者であるテモテやテトス個人に送ったからです。牧者に送っているため、その内容は教会をどのように治めるのが、その指導について教えています。

そしてパウロにとって、テモテは信仰による息子でした。1章2節に書かれています。他の教会宛の手紙には、手紙の送り手がパウロ本人だけでなく、テモテも共に名を連ねているところがあります。つまり、テモテはパウロとキリストにある思いを一つにしており、テモテが教会に送られることは、パウロ自身が行くのと一緒ぐらいでありました。こうした、信仰と福音宣教の働きの受け継ぎが、しっかりとなされていたのです。テモテへの手紙は、さらにテモテ自身が他の、ゆだねることができる人々に働きを任せていくことに重きを置いており、次世代への信仰の継承が神の御心であることを思います。したがって、私たちの教会がそのように信仰を受け渡していくことを、一つの神から与えられた課題として取り組んでいくといいですね。自分自身が神に救われ、そしてまだ神を知らない人には伝道し、神を知った人には信仰によって築き上げられるように手助けしていきます。

### 1A 無益な議論 3-7

前は、1-2節の挨拶の言葉を読みましたが今晚は3節から読み始めます。

### 1B 信仰による神のご計画 3-5

3 私がマケドニアに出発するとき、あなたにお願いしたように、あなたは、エペソにずっととどまっ  
ていて、ある人たちが違った教えを説いたり、4 果てしのない空想話と系図とに心を奪われたりし  
ないように命じてください。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご  
計画の実現をもたらすものではありません。

パウロは、ローマにおいて皇帝の前に立ち、それから釈放されましたが、その後エペソに行っ  
ています。そこでテモテに諸教会を任せて彼自身は、ピリピ、テサロニケなどがあるマケドニアに

旅立ちました。けれども、パウロはテモテがエペソに留まるように願っていました。それは、間違った教えをする者たちが入り込んでいたからですが、エペソにある教会では既に、パウロがエルサレムに向かう途中で、エペソの長老たちに次のように告げていました。「使徒 20:28-30 あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中には入り込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。」凶暴な狼、教会を荒らす者たちが中に入ってくるだけでなく、あなたがたの中からも曲がったことを語って、自分たちのほうに弟子たちを引きこもうとする、というのです。このことは、果たして起こったようです。それでテモテをそこに留まらせ、違った教えを決してすることのないように、命じなさいと願っています。

テモテは、この働きがとっても辛かったと思います。やめられるものなら、やめたいと思っていたに違いありません。テモテ第二の手紙には、「神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。(1:7)」とあります。主の聖霊によって、与えられていた賜物がテモテにはありました。けれども、様々な困難や反対を受けて、その心がくじけて、もう主によって語るまいと思っていたことでしょう。けれども、しっかりと心を砕いて、御言葉をまっすぐに解き明かす務めを行ないなさい、とパウロは勧めました(1テモテ 5:14-15)。私たちが教会として前進している時に、もうやめたいと挫けそうになることがありますね。しかし、主から与えられた御霊の賜物を再び奮い立たせて、しっかりと主の業を行ないましょう、というのがここでの勧めです。

そして、テモテは「命じてください」とパウロから頼まれています。これは軍の司令に使われる言葉です。やってもいい、やらなくてもいいというようないい加減なものではなく、絶対命令であります。これはパウロ自身が自分の権威を振りかざして、テモテに命じているものではありません。1章1節にこうあります。「私たちの救い主なる神と私たちの望みなるキリスト・イエスとの命令による、キリスト・イエスの使徒パウロから」とあります。最高司令官がイエス・キリストで、パウロは命令を受けており、それをテモテに伝えているということです。テモテ自身も、エペソの教会にいる者たちに厳格な命令として伝えています。彼らは、信仰の戦いの兵士であり、福音の真理を主ご自身からゆだねられて、それを守る命令を受けていました。

パウロは、「テモテよ。ゆだねられたものを守りなさい。(6:20)」と言いつけました。私たちのキリスト者としての生活、また教会奉仕者としての生活は、まさにこのことに尽きます。ゆだねられたものを守ることです。司令官から、自分たちの部隊に指令が出て、そこをどんなことがあっても敵からの襲撃にあっても死守するという立場です。福音の真理、信仰によって、恵みによって救われるという神のご計画、この領域をどんなことがあっても守り通すということです。永遠の命を獲得するまで、この信仰の戦いは続きます。主の来られる終わりの日が近づいているにつれて、その戦いは熾烈さを極めます。けれども私たちは、「信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶるとし

てかぶって、慎み深くしていきましょう。(1テサロニケ 5:8)」と勧められています。

そして、この「違った教え」ですが、「教え」という言葉はギリシヤ語で「教えがまとまったもの」という意味があります。体系的な教えのことで、しばしば「教理」と呼ばれます。私たちの教会では、これを「新しい信者の学び」の中で学んでいますし、週ごとの聖書の学びや礼拝の中でも学んでいます。パウロはテモテへの手紙、またテスへの手紙の中で、「健全な教え」「健全な言葉」というものを強調しています。人が健全に育つ、という時に使うような健全であります。極端にならない、バランスを崩さない、言い換えればキリストに倣って行く者になっていくことであります。しかし、「違った」教えを伝えている者たちがいたのです。この「違う」というのは、異質なものの、性質の異なるもの、という意味合いがあります。福音やキリストの教えと呼んでいるけれども、到底、福音ではない異なる教えのことです。ガラテヤにある教会に対して、パウロがこう言いました。「ガラテヤ 1:7 ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるのではありません。あなたがたをかき乱す者たちがいて、キリストの福音を変えてしまおうとしているだけです。」

ここで、教会の中でそういったものが起こっているということに気を付けてください。エペソにある教会も、ガラテヤにある教会も、教会の中で起こっていました。使徒ヨハネは、「彼らは私たちの中から出ていきましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。(1ヨハネ 2:19)」と言いました。これまで仲間だと思っていたところが、違った教えに引きこまれて、その信じていることが変質してしまったために、離れていくということが起こります。私は、数多くの人々がそうになっていったのを見ました。皆さんも、自分の周りでそうになっていった人々をすでに知っておられるかもしれません。

その内容は、「果てしのない空想話と系図」ということです。空想話とは、その訳語のとおり、事実に基づかない話、作り話、あるいは神話ということ。憶測で物事を議論していきます。それに対して健全な教えとは、神の確かな言葉を信じる信仰によって論じていきます。「憶測 対 確かな信仰」です。そして「系図」とありますが、聖書にあるユダヤ人の系図がありますが、そうした系図を使って、いろいろな憶測を立て、作り話をしていたようです。ユダヤ教の律法主義と、ギリシヤの異端、グノーシス主義が合わさった何かがあったようです。

今、日本の教会において違った教えがあります。猛威を振るっているものの中で、「日ユ同祖論」というものがあります。イスラエルの十部族がアッシリヤにとって捕え移されましたが、その末裔の一部が日本列島にやって来て、大和民族は古代イスラエル人であるという論です。神道の中にある建造物や儀式に、ユダヤ教のそれがあると話します。これは憶測であり、歴史的事実はなく、聖書的根拠にも著しく欠けています。そして、なぜそのような教えに飛びつくのか？日本において、なかなか福音を信じる人が起こされないからです。それで、日本民族の中に、その民族に神の選びを見つけて、それで日本が民族として救われることを願うからです。これは、ガラテヤ書にある、ユダヤ主義そのものであります。ユダヤ人であることに救いを見つけようとする、「肉の誇り」を異なる福音としてパウロは断罪したのです。パウロは、生粋のイスラエル人でした。律法においても、

非の打ち所のない者でした。しかし、「私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。(ピリピ 3:7)」としました。

その他、少し関連したもので、「セカンド・チャンス」というものがあります。これは死んだ後にも福音を聞いて救われるチャンス、機会があるという教えです。自分の愛する人が地獄に行ってしまったということで悲しむ日本の人々が多いので、ちょうど日本の仏教のように死者への弔い、死者のための祈りも捧げられるようにしたものです。いいえ、私たちは生きている間に、この地上で行ったことについて、神に申し開きをするのです(2コリント 5:10)。

さらに「無教会論」がものすごく流行っています。教会は生きた有機体だ、だから教会という組織に属するのではなく、自分たちがいるところ、そこが教会なのだ、というものです。そこには、立てられた権威に従う、また互いに服従するという基本がなくなっています。ですから、教えていることは健全なように見えて、自分の心地よいように、自分の願っているように、自分が正しいと言えるようなところに実質持っていつているので、表向きは敬虔なようでもその実を否定してしまっています。キリスト中心ではなく、自分中心になるという性質を持っています。

こうした違った教えの結ばれる実は何でしょうか、「論議を引き起こすだけ」とあります。そうです、実が結ばれていないのです。議論は引き起こし、仲間割れをさせ、御体を傷つける方向へと持っていく。ゆえに、違った教えはしてはならぬと軍の司令官のような命令を受けているのです。

5 この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。

私たちの目指すべきものは、とても単純で、シンプルです。4 節に「信仰による神の救いのご計画の実現をもたらす」とありました。神の救いの計画とありますが、「神のご計画を建て上げる」というように訳すこともできます。パウロが、エペソの長老たちを集めて語った言葉です。「使徒 20:27 私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」イエスご自身が復活後、神のご計画全体を解き明かされました。「ルカ 24:44 わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」そして、主は、キリストが苦しみを受け、三日目によみがえり、罪の赦しを与える悔い改めが、エルサレムからあらゆる国の人々に宣べ伝えられる、と言われました。このキリストを中心とする神の救いのご計画を、余すところなく伝えるのです。

その目標が、「愛」であるとパウロははっきりと言っています。イエス様は、私たちに対する命令として、「ヨハネ 13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」互いに愛し合うのですが、それは、「わたしがあなたがたを愛したように」とあります。愛し合うという中に、自

分自身がキリストが自分を愛されたという愛を知らないといけないのですが、その愛とは何か？「ローマ 5:8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」キリストが私の罪のために、その供え物となって死んでくださった。この愛に満たされて、キリストに満たされて、互いに兄弟たちを交わりを保つのです。

「きよい心」とありますね。清い心は、自分が何かを行なったら清められるのではなく、信仰によって清められます。「使徒 15:8-9 そして、人の心の中を知っておられる神は、私たちに与えられたと同じように異邦人にも聖霊を与えて、彼らのためにあかしをし、私たちと彼らとに何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。」主の御言葉を聞いて、それを信じると、聖霊が私たちの心を清めてくださいます。この清い心を保ちます。それから、「正しい良心」とあります。この言葉も、テモテへの手紙で強調されているものです。良心は、神から与えられている心の物差しのようなもので、何が悪いか良いかを判断することができるようにされています。その良心が痛めば、主の前に出ていき、汚れた心を清めていただきます。しかし、偽りの教えを受けると、ちょうど火傷をした肌の感覚がなくなるように、「良心が麻痺」するとパウロは警告しています(4:2)。そして、「偽りのない信仰」です。信じているように見せかけて、実はそうではないという偽りを脱ぎ捨てたところの信仰です。ヤコブがこのことを取り扱いました。「ヤコブ 2:17 信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです。」その人がいくら、「私はこれを信じています。」と言っても、それが行ないに見られなかったら、その信仰は死んだものであり、偽りです。

## 2B 無知な律法の教師 6-7

ですから、私たちには目標地点があるのです。その目標から目を話し、教会の活動は行っているけれども焦点がずれていってしまいます。その焦点をずれないでいるようにすること、焦点に戻すことが、私たちがキリスト者として、また教会として集まっている理由です。しかし、エペソにある教会では、その目当てを見失った人々がいました。

6 ある人たちはこの目当てを見失い、わき道にそれて無益な議論に走り、7 律法の教師でありたいと望みながら、自分の言っていることも、また強く主張していることについても理解していません。

「わき道」にそれた、という表現がいいです。なぜなら、これらの違った教えは、真っ向からイエスを否定するものではないからです。イエス様のほうに向いていながら、何か他のこと、それ自体は大切なことかもしれませんが、必ずしも追い求めなくてもよいもの、そういった二義的なことを追い求めて、それで脇道に逸れていきます。そして、それを律法を使って語っていくものですから、泥沼です。聖書の言葉を使いながら、なおのこと神の御心を甚だ損なう議論へと持って行くのです。

言い換えると、私たちの信仰の戦いは「注意を逸らすものから守られる戦い」とも言えます。本質的ではないことを、自分に注意を引き寄せようとして議論の的にしていく手法です。私たちは肉

ある者で、弱い者たちですから、そうした弱い人を支え助けなさいという命令があります。けれども、意識的に弱い人々を自分の欲しているところに引き寄せて、調和、キリストの御体の一致を引き裂こうとする人々がいます。そういう人々は、教会から出てもらうしかありません。「ローマ 16:17-18 兄弟たち。私はあなたがたに願います。あなたがたの学んだ教えにそむいて、分裂とつまづきを引き起こす人たちを警戒してください。彼らから遠ざかりなさい。そういう人たちは、私たちの主キリストに仕えないで、自分の欲に仕えているのです。彼らは、なめらかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましているのです。」私たちは、日曜日の説教で、マリヤとマルタの話を読みましたが、マルタが主の足元にいたところ、他のことに心が割れて、それで主が気にかけておられないとして詰り、マリヤも詰ったところを見ましたが、このようなことにならないための戦い、と言ったらよいでしょうか。

そして7節にあるように、ユダヤ教に関わる偽りの教えだったので、律法の知識をたくさん使っているのですが、自分が何を話しているのか分かっていないということです。キリスト教会の中で、数多くの知識を振りかざしているけれども、脇道にそれていく人々は大勢います。その知識は膨大なので、「なぜ、こんなにも聖書に通じているのに、分からないのか？」と思います。いいえ、知識と知恵は異なるのです。知恵は、主を恐れるところから始まりますが、その始まりを忘れているのです。

## **2A 律法の有益 8-11**

### **1B 正しくない者たちのもの**

8 しかし私たちは知っています。律法は、もし次のことを知っていて正しく用いるならば、良いものです。9 すなわち、律法は、正しい人のためにあるのではなく、律法を無視する不従順な者、不敬虔な罪人、汚らしい俗物、父や母を殺す者、人を殺す者、10 不品行な者、男色をする者、人を誘拐する者、うそをつく者、偽証をする者などのため、またそのほか健全な教えにそむく事のためにあるのです。

律法についての正しい教えをパウロは伝えます。律法そのものは悪いものではありません、ローマ 8 章には、「律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。(12節)」とあります。自分を正しくするために律法はありません。そうではなく、自分がいかに罪深いかを明らかにする、神の聖なる鏡が律法です。「律法を無視する不従順な者、不敬虔な罪人、汚らしい俗物」のためにあると言っています。

ですから、ここでモーセの十戒に照らして、パウロはどういう人たちのためにあるかを話しています。「父と母を敬え」と主は命じられましたが、心は「こんな奴、死んでしまえ」と親に対して歯向かっている自分がいます。「殺してはならない」と主は命じられたのに、心で人を憎んでいます。「1ヨハネ 3:15 兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。」とありますが、どれだけ私たちはこの真理に背いた

ことでしょうか？そして、「姦淫してはならない」とありますが、「不品行な者、男色をする者」とあります。心で情欲をもって女を見る、また不自然な情欲をもって男と男が寝るということです。そして、「盗んではならない」という戒めがありますが、「人を誘拐する者」とあります。人の心を盗んで、それで虐げます。それから、「偽りの証言をしてはならない」という戒めに対しては、「うそをつく者、偽証をする者」とあるのです。私たちは、言葉だけではなく行いによって、また偽善によって嘘をつくこともできます。こうやって、律法が自分たちの内なる態度に対するものであることを知っている必要があり、その中で福音へと導かれるのです。

律法を議論しながら、実はその議論が自分の敬虔に役立つことはなく、むしろこうした罪また肉の行ないを放置したままで展開していくことは、十分に起こっていることです。パウロがここで「健全な教え」と再び言っていますが、テトスへの手紙でも同じことを話しています。その部分を読みましょう。

「1:13 この証言はほんとうなのです。ですから、きびしく戒めて、人々の信仰を健全にし、1:14 ユダヤ人の空想話や、真理から離れた人々の戒めには心を寄せないようにさせなさい。1:15 きよい人々には、すべてのものがきよいのです。しかし、汚れた、不信仰な人々には、何一つきよいものはありません。それどころか、その知性と良心までも汚れています。1:16 彼らは、神を知っていると口では言いますが、行ないでは否定しています。実に忌まわしく、不従順で、どんな良いわざにも不適合です。」信仰の健全化とは、空想話や真理から離れた人々の戒めに心を寄せないことです。こうした人々は、これを食べるな、あれをするなという律法主義に陥っていますが、心については全く効力がなく、知性と良心までもが汚れています。そして、神を知っているとは言うのですが、行ないでは否定するのです。こうしたものから離れることです。

そして、「2:1 しかし、あなたは健全な教えにふさわしいことを話しなさい。2:2 老人たちには、自制し、謹厳で、慎み深くし、信仰と愛と忍耐とにおいて健全であるように。2:3 同じように、年をとった婦人たちには、神に仕えている者らしく敬虔にふるまい、悪口を言わず、大酒のとりこにならず、良いことを教える者であるように。2:4 そうすれば、彼女たちは、若い婦人たちに向かって、夫を愛し、子どもを愛し、2:5 慎み深く、貞潔で、家事に励み、優しく、自分の夫に従順であるようにと、さとすことができます。それは、神のことばがそしられるようなことのないためです。2:6 同じように、若い人々には、思慮深くあるように勧めなさい。2:7 また、すべての点で自分自身が良いわざの模範となり、教えにおいては純正で、威厳を保ち、2:8 非難すべきところのない、健全なことばを用いなさい。そうすれば、敵対する者も、私たちについて、何も悪いことが言えなくなって、恥じ入ることになるでしょう。」このように、それぞれの生活の中で、落ち着いた、しっかりとした生活を送ることで、敬虔にかなった生活を送ることで、これらはとても地味ですが、いや地味だからこそ神の栄光、キリストのへりくだりに裏打ちされた神の栄光が表れます。

## 2B 栄光の福音

11 祝福に満ちた神の、栄光の福音によれば、こうなのであって、私はその福音をゆだねられたのです。

律法を正しく用いていけば、それは栄光の福音に沿ったことであると言っています。それは何か、「キリストが罪人を救うために来られた」という福音です。律法を正しく用いれば、私たちがいかに罪深い者であるかを知ります。私たちは、キリストの十字架から卒業する者ではありません。聖書を読んで、十分勉強したから、私はもっと高度な人間になれる。教会生活というダサイことではなく、もっと何か大きなことができる、というような、卒業クリスチャンがいます。いいえ、「私は罪人です、私を憐れんでください。」という福音の中に生きるのです。それは祝福に満ちた神の福音です。私たちは、ただ十字架のそばにいる罪人であり、罪赦された者であり、その赦しによって心が清められ、喜び、神に感謝し、そして神に仕えるのです。そこにあるのは、天における神の霊的祝福が、キリストによって全て注がれている、というものです。

このようなすばらしい福音、これを私はゆだねられました、と告白しています。これを守るために彼は使徒として召されました。そして12節から、いかに自分が9-10節に書いてある律法に照らして、罪深い者であるのかを語り、そして神の憐れみを受けた使徒となっているのだという、彼の謙遜な証しが書かれています。私たちもこの福音のために聖別されて、神に仕える者となりました。このところに、留まっていましょう。道を逸らさせようとする違った教えが、あちこちにあります。それから私たちを守るのは、律法の正しい使い方、つまり聖なる神の前に出る、罪が清められ、赦されていたことを知る、その神の恵みに感動して、神の命令に応答して生きる。このような生き方です。この福音がゆだねられています、これをしっかりと守るのです。これが信仰の戦いであり、最高司令官イエス・キリストからの命令です。